2026 年 4 月 30 日 ISSN 0916-9237

アメリカ学会会報

－The American Studies Newsletter－

No.220 April 2026

ICE の活動に想うこと

佐　藤　　円

第二次トランプ政権が発足以来展開してきた排外主義的移民政策が，昨年末から多くの人びとの関心を集めている。そもそも大統領選挙運動中からトランプは，大量に流入してくる非合法移民が重大犯罪の温床となっているとアメリカ市民の不安を煽り，選挙に勝利して政権に就いてからは，公約通り非合法移民の摘発と強制送還を，国土安全保障省の移民税関捜査局（ICE）や税関国境取締局（CBP）を使って強行してきた。報道によると，トランプ政権が発足した 2025 年 1 月から 2026 年 1 月の末までに，非合法移民の摘発や拘留に関連して 40 人が命を落としたと言う。もちろんこのなかには，2026 年 1 月にミネソタ州ミネアポリス市での非合法移民の摘発に対する抗議活動中に ICE と CBP の捜査官によって射殺されたアメリカ市民レネー・ニコール・グッドとアレックス・プレティも含まれている。捜査官の公務執行を妨害した，あるいは捜査官に危害を加えようとしたとは言えないような行為によって一方的に射殺される二人の姿が SNS 上で拡散され，その一方でトランプ政権側が射殺された二人に非があると捜査官を擁護するに及んで，特に非合法移民の摘発では主役であった ICE に対する抗議が各地で燃え上がった。

この二人のアメリカ市民の射殺に対してオバマ元大統領は，“a wake-up call for every American”という表現を使って，人権を無視した非合法移民の摘発が看過できないところまで来たと声明を発表した。しかし殺害された二人が白人であったことから，非白人の一部からは，これまでも多くの非白人の非合法移民が捜査や拘留で命を落としてきたにもかかわらず，白人の犠牲者が出て初めて状況の深刻さに「目覚めろ」などと言うのは，いかにも鈍感で人種差別的だとの批判も出た。確かにそれは一面の真実ではあるが，それでも射殺された二人は，自らの地域社会に暮らす非合法移民に対する無慈悲な摘発を看過できないとして街に出た「目覚めた白人」市民であったことも忘れてはならないであろう。このような人権感覚の鋭さに，今後への希望を感じざるを得ない。

他方，この ICE などの活動で身の危険を感じているのは，非合法移民たちだけではない。筆者が研究対象としているアメリカ先住民も，その風貌がラティンクスと見分けがつかないことが多いことから，しばしば捜査の標的とされてきた。身分証の提示を求められ，それをレイシャル・プロファイリングだとして拒否しようものなら，たちまち逮捕されるのである。またたとえ各先住民の部族政府が発行する部族民証を所持していたとしても，捜査官はそれを正式な身分証とは認めずに拘束する場合もある。特に多くの先住民が暮らすアメリカ南西部ではこのような事態が頻発しており，それに抗議する先住民の声が SNS に数多く上がっていたが，そのなかには印象的な言葉がいくつかあった。例えばある先住民女性は，国籍を疑い身分証の提示を求める ICE の捜査官に対して，“We are Native Americans. We are the first ones.…We didn’t cross the border. The border crossed us”と反論していた。これはまさに近代国家（この場合ではアメリカとメキシコ）が先住民の同意なしに勝手に国境線を引いてきたという歴史的不正義を指摘して捜査官に抗議（もしくは講義）するものであった。またそれ以外では，“No one is illegal on stolen land”というスローガンを叫ぶアメリカ先住民の声をしばしば耳にした。このスローガンは，歌手のビリー・アイリッシュが先日のグラミー賞授賞式の挨拶で ICE の活動を非難する際に使ったことでも有名になったが，その意味するところは，「そもそも非合法的に奪われた土地に暮らす人間に非合法の人間なんていない」というもので，アメリカ合衆国の成り立ちにある不正義を指摘しつつ，皮肉を込めてトランプ政権の移民政策を批判したものである。このスローガンを先住民ではないビリー・アイリッシュが使ったことには一部で反発もあったが，先住民が使う場合には簡単に反論ができないすごみが出る。このように非合法移民をめぐる問題も，先住民の視点から見てみると，アメリカの歴史を学ぶこと，そして語ることの意義を再確認することになるのである。

（大妻女子大学）

2026 年アメリカ学会　第 60 回年次大会 プログラム

1.　**開催日**　2026 年 6 月 6 日（土）・6 月 7 日（日）
2.　**会場**　東京学芸大学　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1　S 棟（南講義棟）
　大会企画委員長　中垣　恒太郎　knakagaki アットマーク senshu-u.jp
　会場責任者　菅（七戸）美弥　m-suga アットマーク u-gakugei.ac.jp
3.　**プログラム**　（報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です）
　* タイトルの日英別は発表言語によるものです。
　* 教室は変更の可能性があります。
　* 未定部分は今後ホームページにて周知致します。
　* 今大会の分科会は原則オンラインで開催されます。
4.　**共催**　東京学芸大学

第 1 日 2026 年 6 月 6 日（土）
午前の部
自由論題報告　9:00〜10:45

【Session A 古典文学再読 Re-reading Literary Canons】S103 教室
司会：小澤英実（東京学芸大学）
討論者：大串尚代（慶應義塾大学）
1.　報告者：松原留美（九州女子大学）
　「終わらない分断―奴隷解放運動の起点とハリエット・ビーチャー・ストウ『アンクル・トムの小屋』の再検討」
2.　報告者：渡久山幸功（琉球大学）
　「美しい執着と痛々しい幻想―アメリカの神話がロマンスと共鳴するとき」
3.　報告者：森脇俊雅（関西学院大学）
　「ローラ・インガルス・ワイルダーとアメリカ保守主義」

【Session B 開かれたアメリカ，閉じるアメリカ Open America, Closing America】S203 教室
司会：小川真和子（立命館大学）
討論者：守屋友江（南山大学）
1.　報告者：木村智（ハーバード大学・院）
　「1907 年の宗教リベラリズム―ボストン知識人と国際宗教運動」
2.　報告者：小澤智子（武蔵野美術大学）
　「アメリカを見据えた移民船の『婦人監督』に関する報道」
3.　報告者：大津留（北川）智恵子（関西大学）
　「都市と連邦の確執―移民改革管理法と聖域都市」

【Session C アイディア，イデオロギー，政策 Ideas, Ideologies, and Policies】S303 教室
司会：会沢恒（北海道大学）
討論者：菅原和行（福岡大学）
1.　報告者：藤崎奨大（慶應義塾大学・院）
　「州公務員労使紛争の仲裁制度はなぜ導入されたか―1960 年代以降のニューヨーク立法にみる労使関係専門家の役割」
2.　報告者：伊藤孝治（大阪大学）
　「海洋ごみ問題の萌芽―1970 年代の米国における問題化の過程」
3.　報告者：小椋郁馬（一橋大学）
　「アメリカの有権者における社会ソーティングの経験的分析」

休憩　10:45〜12:00

午後の部
理事・評議員会　11:00〜11:45　S410 教室
清水博賞・中原伸之賞・斎藤眞賞授賞式　12:00〜12:20　S410 教室

アメリカ学会設立 60 周年記念企画　S410 教室
第 1 部　会長講演　12:30〜14:00（英語）
司会：Nahoko Tsuneyama 常山菜穂子（JAAS 副会長，慶應義塾大学）

講演者：
JAAS 会長 Hiroo Nakajima 中嶋啓雄（大阪大学）
ASAK 会長 Ihn-hwi Park（梨花女子大学校）
ASA 次期会長 Tanisha Ford（The City University of New York）

第 2 部　60 周年記念シンポジウム　14:10〜17:10
「アメリカ研究 60 年―変化と継続，そして未来への展望 Sixty Years of American Studies: Changes, Continuities, and Future Prospects」

前半：The Future of American Studies under the Second Trump Administration　14:10〜15:30
（英語，質疑応答のみ日英両語）
趣旨説明・司会：Kotaro Nakano 中野耕太郎（JAAS 副会長，東京大学）
発言者：
Takeshi Umekawa 梅川健（東京大学）
Yoshiaki Furui 古井義昭（立教大学）
Seiko Mimaki 三牧聖子（同志社大学）

後半：これまでの 60 年とこれからの展望（日本語）　15:40〜17:10
司会：前嶋和弘（JAAS 前会長／上智大学）
発言者：
油井大三郎（JAAS 元会長／一橋大学・東京大学名誉教授）
古矢旬　（JAAS 元会長／北海道大学・東京大学名誉教授）
松本悠子　（JAAS 元会長／中央大学名誉教授）
久保文明　（JAAS 元会長／東京大学名誉教授）
髙橋裕子　（JAAS 元会長／津田塾大学学長）
宇沢美子　（JAAS 元会長／慶應義塾大学名誉教授）

懇親会　17:30〜19:00　生協第一食堂

第 2 日 2026 年 6 月 7 日（日）
午前の部
部会・ワークショップ　　9:30〜12:00

【ASA ワークショップ“Power and Resistance in Representation: Technology, Media, and Race/Ethnicity”】S103 教室
Chair: Michael Larson（Keio University 慶應義塾大学）
Discussant: Mari Nagatomi 永冨真梨（Kansai University 関西大学）
Speakers:
Russ Castronovo（ASA, University of Wisconsin-Madison）“What Time is AI?”
Mark Redondo Villegas（ASA, Franklin & Marshall College）“Interracial Crossplay from Geeks to MCs”
Keiko Fukunishi 福西恵子（Doshisha University 同志社大学）“Paradoxes of American Empire: Whiteness and Blackness in Turn-of-the-Twentieth-Century Reenactment Films”

【部会 A　アジア・太平洋から見るアメリカ研究―交差する視点，60 周年の現在地】S203 教室
司会：李里花（早稲田大学）
討論者：菅（七戸）美弥（東京学芸大学）
報告者：
飯島真里子（上智大学）
「移動する人・モノがつなぐ『周辺』地域」
斎木郁乃（東京学芸大学）
「帝国主義とアジアの鼓動―環太平洋的視座から読む『白鯨』」
常山菜穂子（慶應義塾大学）
「アジアの視点とアメリカ演劇研究―明治期ハワイにおける太平洋横断的日本人芝居ネットワーク」

【部会 B　トランプ政権下の歴史観の再構築】S303 教室
司会：会沢恒（北海道大学）
討論者：貴堂嘉之（一橋大学）

報告者：
　中野博文（北九州市立大学）
　　「文化戦争の史的文脈―世界政治に位置づけた右翼ポピュリズムの系譜」
　石山徳子（明治大学）
　　「セトラー・コロニアリズムとトランプ政治―先住民族から上がる声」
　秋山かおり（同志社大学）
　　「敵性外国人法の行使における共通性と非共通性―1941 年と 2025 年」

休憩　　12:00～12:45
新理事会　　12:10～12:50　W110 教室
総会　　12:50～13:20　W110 教室

午後の部
部会・ワークショップ　　13:30～16:00

【部会 C　アメリカ帝国論の現在】S203 教室
司会：森丈夫（福岡大学）
討論者：奥田暁代（慶應義塾大学）
報告者：
　荒木和華子（明治大学）
　　「『帝国の新時代』のジェンダー史的考察―奴隷制，文明化，使命」
　三島武之介（城西国際大学）
　　「世紀転換期アメリカにおける『大論争』―グローバルな『非公式帝国』とリージョナルな『公式帝国』のあいだ」
　塚田幸光（関西学院大学）
　　「帝国のマジック―ハリー・フーディーニと世紀末アメリカ」

【部会 D　矛盾と向き合う―加担・抵抗・連帯―研究とアクティヴィズムの現場から】S303 教室
司会・報告者：
　中村理香（成城大学）
　　「BLM 運動下での『コロナ・ヘイトクライム法』への問いとクロス・レイシャルな連帯―アジアン・アボリションという実践」
報告者：
　松永京子（広島大学）
　　「核時代の抵抗とつながりの生態学―1964 年被爆者のハーレム訪問から」
　内野クリスタル（同志社大学）
　　「砦を焼き，未来を築く―先住民アナキスト批評と反植民地主義的プラクシスとしてのクリティカル・プレイ」
　米山リサ（トロント大学）
　　「連帯のアナロジックスを超えて―相関性（リレーショナリティ）の思想の系譜とクウィア・オヴ・カラー批評」

4.　注意事項
1）　今大会は分科会（オンライン開催）を除き対面のみでの開催となります。
2）　大会参加登録は，参加登録ページの URL を，学会ホームページ及び，アメリカ学会会員用メーリングリストにて配信いたしますので，2026 年 5 月 15 日（金）までにお願いいたします。会員の方でメールが届かなかった方は，「迷惑メール（junk mail）」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は，お手数をおかけしますが，学会 HP の「お問い合わせ・応募フォーム」の年次大会企画委員会までご連絡ください。
3）　年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
4）　会場までの交通アクセスについては，下記 5. の他，学会ホームページをご覧ください。宿泊や交通手段の確保は各自でお願いいたします。
5）　非会員の大会参加費は 1,000 円です。大会受付にてお支払いください。
6）　理事・評議員会について，弁当の注文は受け付けませんので，ご了承ください。

5.　会場案内

受付	S101 教室
賛助会員（出版社）ブース	S105 教室
会員控室・ゲスト控室	S106 教室
理事控室	S102 教室

〈東京学芸大学へのアクセス〉※日曜日は正門からお越しください※

・JR 中央線武蔵小金井駅・北口より

【徒歩】約 25 分

【京王バス】

〔5 番バス停〕「小平団地」行に乗車，約 10 分「学芸大正門」下車。

〔5 番バス停〕「国分寺駅北口」行に乗車，約 10 分「学芸大正門」下車。

〔6 番バス停〕「中大循環」に乗車，約 10 分。「学芸小前」下車，東門経由構内へ（ただし，日曜日には東門は閉鎖されます）

・JR 中央線国分寺駅・北口より

【徒歩】約 20 分

【銀河鉄道バス】

〔2 番バス停〕「小平駅南口」行に乗車，約 10 分「学芸大学・辻調理師専門学校 東京」下車，北門経由構内へ。（ただし，日曜日には北門は閉鎖されます）

【京王バス】

〔5 番バス停〕「武蔵小金井駅北口」行に乗車，約 10 分「学芸大正門」下車。

※自動車での入構はご遠慮頂いております。

第 60 回年次大会分科会のご案内

＊本大会の分科会は原則オンラインでの開催になります。

＊未定のスケジュール等については，後日改めて通知いたします。

1. 「アメリカ政治」

責任者：松井孝太（杏林大学）kmatsui アットマーク ks.kyorin-u.ac.jp

報告者①：松本俊太（名城大学）

「アメリカ連邦政府における産業政策論争とその焼き直し：1980-2026」

報告者②：齋藤崇治（名古屋商科大学）

「トランプ政権における連邦検事の抗議の辞任」

開催日時：6 月 12 日（金）19:00～20:40 ／ Zoom で開催

https://us06web.zoom.us/j/89825763668?pwd=bSUGLeHtgPua7MNl0LbWnBbTFFzrpP.1

ミーティング ID：898 2576 3668

パスコード：XWB4QVua

本年度のアメリカ政治分科会は，2 名の会員に最新の研究成果を報告いただく。松本会員は，2010 年代頃から先進各国で関心が再興している「産業政策」と総称される政策に関して報告する。アメリカの場合は，建国以来，事実上の産業政策は行われていた一方で，20 世紀終盤には，体系的な産業政策の導入を主張する勢力や，その流れを汲むニュー・デモクラットの興亡といった前史を有する。本報告は，この時代から 2026 年現在までの産業政策をめぐる政治過程を辿り，現在言われていることの多くは，当時の論争と連続したもの，あるいは焼き直しであることを主張する。齋藤会員は，トランプ政権における連邦検事辞任に関する古澤卓也氏（シカゴ大学）との共同研究を報告する。第一次トランプ政権では，トランプによる連邦検察への介入が相次ぎ，それに対して検察官がしばしば自主的に辞任した。とはいえ，こうした辞任は一斉に起こるものではなく，その判断は検察官間においても分かれる。本報告では，第一次トランプ政権における連邦検事辞任を整理し，その背景・要因を分析することを目標とする。

2. 「アメリカ国際関係史研究」

責任者：吉留公太（神奈川大学）ft101846cs アットマーク jindai.jp

報告者：佐藤雅哉（愛知県立大学）

「佐藤雅哉著『アメリカはなぜイスラエルを支援するのか―揺れ動くまなざしの歴史』（名古屋大学出版会, 2026 年）合評会」

討論者：石黒安里（立命館大学・非常勤講師）

小野沢透（京都大学）

開催日時：6 月 27 日　13 時～15 時 30 分／ Zoom で開催

https://zoom.us/j/95437260763

ミーティング ID：954 3726 0763

パスコード：602805

佐藤会員の近著『アメリカはなぜイスラエルを支援するのか』の合評会を行う。同書の題に掲げられた問いについて，従来はユダヤ系市民のロビー活動や直近の国際情勢を重視した業績が多かった。佐藤会員は，イスラエルに好意的な言説を生み出しやすいアメリカの社会・文化的文脈に注目し，こうした言説が現実政治に及ぼした影響を

歴史的に分析している点に独自性がある。さらに米国政府のイスラエル政策に批判的な勢力にも目配りすることで両国関係を立体的に描き出そうとしている。対象書の理解を深めることによって，アメリカのイスラエル政策や中東国際関係に対するアメリカの関与を分析する視座を再検討する機会としたい。

3. 「日米関係」
本年度休会

4. 「経済・経済史」
責任者：手塚沙織（南山大学）satezuka アットマーク nanzan-u.ac.jp
報告者：安部馨（公益財団法人 高速道路調査会）
「ディズニー進出後のオーランド発展と特別地区」
討論者：加藤一誠（慶應義塾大学）
開催日時：6 月 5 日（金）18:00〜19:30 ／ Zoom で開催
https://nanzan.zoom.us/j/89347730779?pwd=6GXXvtpnmfys7vboLnTNkq2JiuxIs2.1
ミーティング ID：893 4773 0779
パスコード：819376
本報告は安部馨氏（公益財団法人 高速道路調査会）をお迎えし，フロリダ州オーランドの特別区周辺の交通環境の進展を縦軸として，特別区の役割を中心に論じていただく。フロリダ州オーランドは，ディズニー系のみならず，ユニバーサル系のテーマパークなど数々のアミューズメント施設や宿泊施設を有する全米屈指の観光都市である。その先駆けとなったのは，今日，世界最大の集客数を誇るまでとなったディズニーワールドであり，ディズニー系施設の周辺は特別区（Special District）というオーランド市とは別の行政単位内にある。特別区はディズニーがカリフォルニア州アナハイムでの最初のテーマパークの経験を踏まえてオーランド進出に際して設立したものである。ディズニーが運営権限を実質的に有した概要を説明していただいた後，同区外の交通（道路）環境整備への関与，そして，2022 年の同州の「教育における親の権利法（通称「Don't Say Gay」法）」を端緒とした同区の改編までを紹介していただく。

5. 「アジア系アメリカ研究」
責任者：和泉真澄（同志社大学）mizumi アットマーク mail.doshisha.ac.jp
報告者：南川文里（同志社大学）
「越境と包摂のコミュニティ史：『リトルトーキョーは語る』を語る」
開催日時：6 月 11 日（木）：18:00–19:30 ／ Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
報告者は，著書『リトルトーキョーは語る：凝集・越境・包摂の日系アメリカ史』（名古屋大学出版会，2025 年）において，20 世紀ロスアンジェルスのリトルトーキョーの歴史を，越境的な移動者や非日系人との関係に焦点を当てて描きなおした。本報告では，日系コミュニティにとっての「アウトサイダー」として，シアトルで売春に関わりながらも戦前日本で女性評論家として活躍した山田わか，第二次世界大戦時に国家反逆罪に問われた二世トモヤ・カワキタ，1970 年代以降のリトルトーキョー再開発に深く関わったコリア系企業家デヴィッド・ヒョンの 3 名の経験を取り上げ，それぞれの視角から越境的・包摂的なコミュニティの姿をどのように描くことができるのか，議論したい。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」
責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）suzuki-s アットマーク tsurumi-u.ac.jp
報告者：松本悠子（中央大学・名）
「戦場に忘れられた人々」から問い直す歴史研究―人種・ジェンダー・トランスナショナルな視座」
日時：6 月 12 日（金）19:00〜20:30 ／ Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
アメリカ史，ジェンダー史研究の松本悠子氏に，近著である『戦場に忘れられた人々―人種とジェンダーの大戦史』（京都大学学術出版会, 2024 年）の内容をジェンダー研究の視点からご紹介いただく。第一次世界大戦の「戦場」（米英仏を中心に）における人種，労働，戦死者とナショナリズムなどを一国の枠組みにとらわれずにジェンダーの視点から問題提起されるため，今後のジェンダー研究やトランスナショナル・ヒストリーの展望を考える一助となるのではないだろうか。ジェンダー史，人種史，国際関係史，グローバル・ヒストリーなど，広範な関心を持つ会員による活発な議論を期待したい。分科会の後半では，現在のアメリカの「バックラッシュ」とも言えるような研究環境の中で，ジェンダー研究をどう進めるかなどについて情報や意見を交換する場を設ける。

7. 「アメリカ先住民研究」
責任者：野口久美子（明治学院大学）noguchik アットマーク k.meijigakuin.ac.jp
報告者：内田綾子（名古屋大学）
「アメリカ先住民と地下資源開発の歴史的背景」
日時：6 月 8 日（月）19:00 開始／ Zoom で開催
https://us02web.zoom.us/j/88176452373

ミーティング ID：881 7645 2373
パスコード：617324
　アメリカ西部・中部には，金や石炭，石油，ウランなどの豊富な地下資源が埋蔵され，これらの発見と開発が歴史的に合衆国の進出と先住民政策を左右してきたとも言える。本報告では，20 世紀初頭のナヴァホやオーセージの例をとりあげ，居住地域での地下資源開発が部族の土地と自治にどのような影響をもたらしたのかを検討する。それとともに，当時の先住民部族の対応についても考察したい。今日のアメリカでは，アラスカの石油・ガス採掘の規制撤廃，レアアース等を目的としたグリーンランド領有の試みといった動きが見られる。依然として資源獲得競争と経済的な植民地主義が繰り返されようとする中，先住民に多大な影響を及ぼした地下資源開発の歴史的背景を振り返る。

8. 「初期アメリカ」
未定（後日連絡）

9. 「文化・芸術史」
責任者・司会：小林剛（関西大学）go アットマーク kansai-u.ac.jp
座談会「『歴史修正ミュージアム』をきっかけに考えるミュージアムの今」
討論者：小森真樹（武蔵大学）
　　横山佐紀（中央大学）
　　丸山雄生（東海大学）
日時：5 月 29 日（金）16:00～18:00
関西大学東京センターで開催し，その模様を以下の Zoom ミーティングを通じて配信。
https://kansai-u-ac-jp.zoom.us/j/94517621461?pwd=bB4T9f0cors12PA8S6R1CbTJh5SWTz.1
ミーティング ID：945 1762 1461
パスコード：677676
　アメリカの歴史や文化における多様性の表現をめぐり，トランプ政権がスミソニアン協会や他のミュージアムに対して圧力を強めている。2025 年 3 月 27 日，トランプ大統領は「アメリカの歴史に真実と健全さを取り戻す」と題する大統領令に署名し，このなかで過去 10 年にわたる歴史修正主義を強く批判したうえで，スミソニアン協会に広がる「分断的イデオロギー」の影響を問題視した。他にも，ナショナル・ギャラリー・オブ・アートはトランプ政権の反 DEI 条項を受け多様性にまつわる部署を閉鎖し，イェール大学美術館は逆にそれに対して異議を唱えるべくアフリカ美術展の開催に向けて申請していた 2 つの連邦補助金を取り下げた。このように新たな文化戦争をめぐって混沌とした状況にある今，今回の分科会では，多様な歴史修正に取り組んでいる欧米のミュージアムを訪問して執筆された小森真樹氏の『歴史修正ミュージアム』を中心にして，著者も交えた座談会を開催したいと思う。座談会は関西大学東京センターで対面開催とし，その模様をオンラインで配信するという形式を採用するので，多くの方に参加していただきたい。

10. 「アメリカ社会と人種」
責任者：山本航平（就実大学）duchpb42 アットマーク gmail.com
報告者：武井寛（岐阜聖徳学園大学）
「ポスト公民権運動時代の住宅政策の変容―1968 年公正住宅法以後のシカゴを事例にして」
日時：6 月 3 日（水）19:00～21:00 ／ Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
　本報告は，1960 年代後半以降のポスト公民権運動時代のアメリカ合衆国（以下，アメリカ）において，住宅政策がいかに変容してきたのかを，シカゴに焦点を当てて住宅都市開発省（HUD）やシカゴ住宅局（CHA）の政策，公民権団体の活動，そして不動産業者や銀行に注目して明らかにする。アメリカでは 1968 年公正住宅法が成立した後も，住宅の人種統合はあまり進まなかった。しかし，これまで住宅ローンをなかなか得られなった黒人にも住宅ローンが徐々に提供されるようになり，マイホームを手に入れる人々が増えてきた。ところが，住宅を手に入れたがローン返済に苦しみ，最終的に住宅を差し押さえられて手放したことで，生活がむしろ不安定になる黒人が増えきた。本報告はこの現象に着目し，市場原理の効率性を重視した 1980 年代の新自由主義時代の前兆として，1960 年代後半から 1970 年代の連邦政府の住宅政策がいかにシカゴに影響を与えたのかを検証する。

第 61 回年次大会について
第 61 回年次大会は，2027 年 6 月上旬に福岡大学にて開催を予定しています。
開催日時については，後日会報にてお知らせいたします。

2026 年プロセミナー開催のご案内

　今年のプロセミナーは大阪で対面開催いたします。アメリカ学会会員以外にも開かれておりますので，お誘い合わせの上どうぞふるってご参加ください。

会場：大阪大学箕面キャンパス 2 階学術交流室
日時：6 月 5 日（金）13 時～16 時 30 分（時間は変更の可能性があります）
報告者：
大野太郎（一橋大学・院）“Freeway Construction to Provoke Civil Rights Enhancement: How African American Leaders Fought Against Proposed Highway in the 1950s”
井上共誇（東京外国語大学・院）“Who Gets to Speak?: Narrative Authority and Racial Representation in Mark Twain's *Adventures of Huckleberry Finn* and Percival Everett's *James*”
三牧史奈（杏林大学）“How to Tell a True ‘Japanese American’ Story”
ディッキー・ソフィア・ハナ（四国大学）“A Divided America: Trauma and Memory in Julie Otsuka's *When the Emperor was Divine*”

コメンテーター
Professor Tanisha Ford（The City University of New York）
Professor Russ Castronovo（University of Wisconsin-Madison）
Professor Mark Redondo Villegas（Franklin & Marshall College）

会場・プログラム詳細については，5 月に学会 ML でご案内いたします。

国際委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金
―国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内―

アメリカ学会では，国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に，以下の要領で 2026 年度前期の海外渡航奨励金の応募者を募集します。対象となる学会へ参加を予定されておられる方は，どうぞふるってご応募ください。なお今回（前期）の応募対象は，2026 年 8 月～2027 年 2 月に開催される学会です。2027 年 3 月～7 月開催の学会については，後期（12 月募集）の対象となります。

1. 応募資格：
・アメリカ学会の会員であること。年会費の滞納がないこと。
* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
・国際学会やシンポジウムでの発表時に，日本に在住し，日本からの旅費を要すること。
・発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
・大学院生については発表をしない場合も応募可能。

2. 審査基準：
・大学院生等の若手研究者を優先的に検討し，そのほか，助成の必要性，発表の内容を総合的に判断する。
・American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが，これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
・他組織からの援助のないものを原則として優先する。
・そのほか，助成の必要性，発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法，結果発表，発表後の提出書類
次の書類を 6 月 16 日から 30 日までの期間に，5 つ以内の添付ファイルにまとめて，学会 HP（https://www.jaas.gr.jp）右上に表示されている「お問い合わせ・応募」ボタンから国際委員会宛に送ること。「お問い合わせ内容」には「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
(1) 履歴書
(2) 業績書
(3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
(4) 発表のタイトルと要旨（英語で 250-300 語程度とする）
(5)（ASA，ASAK，OAH 以外での発表の場合のみ）当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的，歴史，規模等，字数は指定しないが，簡潔で正確であること）および開催期間
(6) 理由書（奨励金を必要とする理由。字数は指定しないが，簡潔であること。他組織からの援助のないものを原則として優先するので，申請時にほかの組織による援助を申請中か，あるいは援助を受けることが決定した者は，その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには，所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお，旅費・宿泊費（実費）の不足部分に限り，他の補助金との併用が認められる。）

(7) 旅程表(書式自由。日本出国から帰国まで順を追って記載すること。旅程が応募時に確定していない場合は，仮日程で構わない。応募後に旅程変更を行う場合は速やかに報告すること。)
・審査結果は，7月中に応募者に通知し，学会ウェブサイトで公表する。
・発表終了後，2週間以内に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書の写し（旅費・宿泊費）を提出すること。報告書は，学会ウェブサイトに1年間掲載する。

4. 支給額
アジア圏の場合は一人5万円，アジア圏外の場合は一人18万円を原則とする。

国際委員会

ASA 大会への旅費・滞在費補助金の受給者について

2025年11月19日から22日までプエルトリコにおいて開催されたAmerican Studies Association（ASA）年次大会への旅費・滞在費補助金の受給者として，以下の2名が選ばれました。

阿部啓会員（アラバマ大学博士課程）
加藤慶会員（イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校博士課程）

おめでとうございます。

国際委員会

American Studies Association 派遣来日研究者について

2026年のアメリカ学会第60回年次大会に参加する派遣研究者が次の2名に決まりました。

Russ Castronovo（University of Wisconsin-Madison）
専門領域：アメリカ文学，アフリカ系アメリカ文学，アメリカ研究，文化理論，大衆文化
Mark Redondo Villegas（Franklin & Marshall College）
専門領域：アジア系アメリカ研究，エスニック・スタディーズ，大衆文化における異人種間協調

また，大会基調講演者の1人としてASA次期会長を招聘することが決まりました。

Tanisha Ford（The City University of New York）
アメリカ黒人史，アフリカン・ディアスポラ，20世紀アメリカ女性史・ジェンダー史，文化史

国際委員会

Organization of American Historians 派遣来日研究者について

2026年度のOAH/JAAS Short Residency Programは，諸般の事情により来日研究者の募集を行いませんでした。

国際委員会

American Studies Association of Korea 派遣来日研究者のお知らせ

大会基調講演者の1人としてASAK会長を招聘することが決まりました。

Ihn-hwi Park（梨花女子大学校）
専門領域：アメリカ外交，国際安全保障

国際委員会

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には，速やかに事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせください。また，メールアドレスを登録されていない方は，極力ご登録くださいますようご協力をお願いいたします。

新　刊　紹　介

藤本博・河内信幸　著

『ベトナム反戦運動のフィクサー陸井三郎
―ベトナム戦争犯罪調査と国際派知識人の軌跡』

（彩流社，2025 年，4,180 円）

本書は，在野の国際派知識人・陸井三郎の軌跡と業績を整理し，その意義を論じた評伝である。陸井は，ラッセル法廷日本委員会の調査団の一員として，48 歳で初めてベトナムを訪れ，ベトナム戦争の戦争犯罪調査に従事し，法廷で調査結果を証言した。国際的な人脈を築いた陸井の人物像を通して，ラッセル法廷の先駆的な歴史的・今日的意義を想起させる共著作となっている。

本書は二部構成である。第一部「ベトナム戦争犯罪調査，ベトナム国際反戦運動と陸井三郎」では，藤本博がラッセル法廷を出発点とするベトナム戦争犯罪調査の過程で，陸井が果たした役割を明らかにする。あわせて，陸井が全国紙に投稿した論考から 7 篇を収録している。

陸井は，アメリカの戦争犯罪を立証・断罪するため，北ベトナムと協力して現地調査を実施した。また，各国際会議においては，ベトナム，欧米，日本の組織的取り組みを結びつけ，世界の反戦・平和運動家や知識人と連携して中核的な役割を果たした。さらに，南北ベトナムの「内戦」とする見方を，ベトナムの民族基本権に対する侵略と位置づける議論に調整し，日本の戦争協力という加担の問題を指摘する点でも，陸井の貢献は重要であった。

第二部「陸井三郎とはどのような人物だったのか」では，河内信幸が陸井の生い立ちからアメリカ研究，ベトナム戦争調査に至る歩みをたどる。オーラルヒストリーの陸井自身の語りから，その人間性も浮かび上がる。国際情勢・社会情勢の推移を踏まえてまとめられた「陸井三郎　略年譜」は，在野の知識人としての知的営為の広がりを把握できる有用な資料である。

大学教育や留学経験を持たず，生涯在野で活躍した国際派知識人の知的基盤は，青山学院高商部で培った高い語学力と幅広い教養にあったという。占領期には，アメリカ文化センターの新聞や雑誌からマッカーシズムを詳しく知り，体制順応的な言論に不信を抱いた経験から，陸井は一次資料を重視し，事実に基づく緻密な議論を徹底する姿勢を貫いた。戦争犯罪調査の際も，戦闘行為の真実が隠匿されることに危機感を抱いていた。東京で三度にわたり焼け出された戦争体験は，人権意識と反戦思想の形成に深く影響している。また，戦火の中でも生き生きと暮らすベトナムの人々に心打たれ，生涯にわたってベトナムに寄り添っていた。多数の寄稿や翻訳，書籍出版は生計のための手段であると同時に，世界の良心に訴え，反戦世論を喚起する活動としての意味もあったのである。

今日では，「ガザ法廷」がイスラエルの行為を告発し，「ウイグル法廷」が中国によるウイグル人弾圧を裁くなど，ラッセル法廷の現代的展開が示されている。こうした今日版のラッセル法廷を通して，ベトナム戦争犯罪調査で提起された諸課題がなお未完であることも改めて認識される。終わりなき「暴力」が続く時代にあって，陸井の論考の今日的意義がいかに大きいかを，本書は示している。

佐藤真千子（静岡県立大学）

新田啓子　著

『アメリカの黒い傷痕―〈生態（エコロジー）〉としての人種と文学の潜勢力』

（青土社，2025 年，3,520 円）

本書は，アメリカ文学と人種問題をめぐる思索を，〈生態〉という視座から読み解く意欲的かつ独創的な研究書である。行政や司法の対策をすり抜けて人々の中に根強く残る人種意識と，その意識がもたらす状況を，文学がいかに描き出してきたのかを明らかにする。本書は，1619 年にアフリカの人々が植民地ヴァージニアに到来して以来，現在に至るまで続くアメリカの人種主義と，それに関わる文学の生成を動的な現象として捉え，精緻に分析する。

序章では，W・E・B・デュボイスの思想と文学的実践が取り上げられ，彼が示した人種意識の二重性や歴史的記憶が，本書の〈人種＝生態〉という枠組みにどのような示唆を与えるかが論じられる。デュボイスのテクストは，抑圧の構造を照射すると同時に，そこから生まれる知的・倫理的可能性を示すものとして位置づけられている。

第Ⅰ部「黒人が生まれ出づる〈生の論理〉」では，奴隷制という極限状況のもとで形成された生の在り方が考察される。奴隷制社会における母性の剝奪と再編を通して，人種がいかに物語化されてきたかが検討されるほか，身体表象を軸に南部という空間の想像力が読み解かれ，抑圧の只中においてなお生を肯定しうる力や性の問題が多角的に論じられる。

第Ⅱ部「生まれ出たものが〈住む条件〉」は，アメリカという国家の基層を成す歴史的・情動的条件に光を当てる。「一六一九」という起点や環大西洋奴隷貿易を視野に入れつつ，先住民や帝国的拡張との関係が検討される。奴隷制廃止をめぐる情動の動員と文学的表現の分析を通して，解放後も続く闘争や依存，絆の問題が描き出され，自由の複雑な位相が浮かび上がる。

第Ⅲ部「生を遷移させる〈人種＝生態〉」では，人種秩序の変容と再編が取り上げられる。南部小説における記憶とカラーライン，「白い屑」に映る階級と人種の交錯，さらには構造的暴力の下で「安い命」が連鎖する風土などが論じられ，人種が生態系のように連関し合う構造が明らかにされる。終章「アメリカン・デモクラシーのエコロジー」では，これらの議論が総合され，民主主義そのものをも生態的視野から再考する。

このように本書は，建国期から現代までのアメリカ文学を横断しつつ，理論的考察と具体的読解を往還する構成によって，読者に新たな視座を提示し，文学のもつ創造的な力を再認識させる契機となるだろう。アメリカという国家の根底に流れる人種意識を有機的な人間的営みとしての〈生態〉の観点から描き出した本書は，人種と文学をめぐる議論に新たな地平を切り拓くものであり，読了後なお思索がやまない，深い感動と知的刺激をもたらす一冊である。

朴珣英（金城学院大学）

土屋和代　著

『福祉権運動のアメリカ——ブラック・ラディカリズムとフェミニズム』

（岩波書店，2025 年，3,300 円）

本書は，社会福祉をめぐる黒人の闘いの歴史について数多くの重要な論考を発表してきた筆者が，それらを加筆修正し一冊にまとめた待望の書である。具体的には要扶養児童家族扶助（AFDC）の受給者たちが 1960 年代半ばから 70 年代半ばに推進した福祉権運動を，全米福祉権団体（NWRO）とその牽引役の一人であった黒人女性ジョニー・ティルモンの活動を中心に検討している。福祉権運動を「受給者自身の，日々の生活から紡ぎ出された〈声〉と，その〈声〉を届けるための運動」（8 頁）と評する本書は，アメリカにおける社会保障政策の変遷をたどる中で，最も苦しい立場に置かれた人びとの生きる権利をさらに蹂躙する数々の仕組みを明らかにするとともに，そうした「弱者切り捨て」の政策に対して受給者たちが上げた声を，貴重な一次史料から丁寧に掬い上げている。

AFDC の成立経緯を概観した第 1 章は，有色の女性やシングルマザー受給者の割合が増えるにつれ，人種・性差別的な「福祉依存」の言説により受給者のスティグマ化が進む様子を詳述する。本章後半で紹介される詩は，こうした窮状に対する受給者自身の異議申し立てである。第 2 章はティルモンの NWRO 加入前の活動を，彼女が結成した全米初の当事者団体「貧困児童扶助を受給する名もなき母親たち」の事例を通じて明らかにしている。

本書の中盤からは，「十分な収入」「尊厳」「正義」「民主主義」を掲げた NWRO の活動の詳細が検討される。第 3 章は「福祉依存」を断ち切る名目で導入，義務化された「就労奨励プログラム」の問題点と，このワークフェアの撤廃を求めた NWRO の運動を考察している。第 4 章は衣食住の重要性を説き保証所得の実現を目指した活動を通じて，NWRO がいかに公民権運動の射程を生存権の問題にまで拡大していったかを描出する。第 5 章は受給者に対する強制不妊手術の事例を取り上げ，受給者と子供の身体が国家の管理・統制下に置かれる中での NWRO による性と生殖をめぐる正義の闘いに焦点を当てる。第 6 章は 1970 年代前半に福祉権運動が後退していく様子を，NWRO の活動の限界や AFDC を取り巻く政治的・社会的状況の変化から分析している。最後に福祉権運動の歴史的意義を再検討し，現代に引き継がれる福祉権運動の事例を紹介する終章で結ばれている。

NWRO が打ち立てた「福祉権」は，福祉や労働の概念を再定義し，生存権，保証所得，性と生殖の自己決定権といった多様な権利を包摂しようとする革新的な思想であり，筆者はその担い手たちを「インターセクショナリティの先駆け的な思想を編み出した存在」（14 頁）と呼んでいる。黒人自由闘争史，女性解放運動史からもこぼれ落ちてしまうような「名もなき人びと」の物語に寄り添い続けてきた筆者ならではの眼差しと筆致に満ちた本書が，広く長く読まれることを期待したい。

坂下史子（上智大学）

中野博文　著

『暴力とポピュリズムのアメリカ史—ミリシアがもたらす分断』

（岩波書店，2024 年，1034 円）

いま，アメリカをどう考えればいいのだろうか。いったん選挙で勝利しただけの多数派が，党派的な利益や価値観の実現に邁進しているかに見える。そして，憲法が枠づけているはずの権限を濫用し，憲法が保障するはずの自由を抑圧している。アメリカの歴史は，時としてゆり戻しを経験しつつも，独立宣言のすべての人の自由と平等を実現しようとするものであったはずだった。しかしいまや，人種，性，市民権の有無，信仰や主義主張などを標的にして，平然と攻撃が加えられているかに見える。

本書は，アメリカのミリシアを中心に，その法的根拠である合衆国憲法修正 2 条の現代的展開と，これまでのミリシアの歴史を細かに描出する。それによれば，現代ではミリシアは白人至上主義など右翼，過激派の主張を体現するものとして組織され，その主義主張の実現のためには，バイデン大統領を選出する会議が開かれていた連邦議会議事堂を襲撃した事件のように，「暴力」も厭わない。また，大統領職を去ろうとしていたトランプの大衆煽動をきっかけとしたこの事件は，修正 2 条を根拠にその「暴力」が正当化される「ポピュリズム」を象徴するものでもあった。加えて，修正 2 条を体現するミリシアや州軍が，当初想定された，専制化した連邦政府を州が打倒する手段から，連邦常備軍の必要に基づき，連邦の指揮が及ぼされていく歴史が細かに紹介されている。

誰かを標的にして実力で不当に排除することが頻発し，修正 2 条がその苗床になる事態への批判に大いに共感する。左右両派にとって共和党あるいは民主党政権が専制的な政治を行なっていると感じさせ，それについて相互に対話して問題を解決できないほどにイデオロギーが分極化していることが，修正 2 条をめぐる問題を難しくしている。いまのアメリカ社会が「暴力」と「ポピュリズム」として批判されるなかで，その正しさがアメリカ社会の一方には共有不可能であることをどう考えるべきかが，問われている。

これへの処方箋として本書は戦う民主主義に言及している。ナチスドイツの反道徳性への反省から戦後西ドイツで採用されたこの制度は，その態度の真摯さや歴史的文脈の一方で，国家が一定の価値観を指定してそれを排除することも厭わないものであった。特に第二次大戦でアメリカが標榜したはずの「自由」「民主主義」をどう守っていくか，岐路に立たされていることを感じさせる。

綺麗事をいうのが難しい時代になった。それでも物事を批判的に考え，議論をし続けていくことがいまこそ必要であるし，「暴力」と「ポピュリズム」への真の抵抗になると考える。

川鍋健（同志社大学）

『アメリカ研究』第 61 号「自由投稿論文」募集のお知らせ

年報編集委員会学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は 2027 年 3 月に第 61 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしております。

1. 内　　容
   アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は，本年度の投稿をご遠慮ください。また，同じ年度に，あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚　　数
   論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。
   執筆要項は学会ホームページを参照のこと。　https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html
3. 原稿締め切り　2026 年 8 月 31 日（月）
4. 提　　出
   投稿希望者は 2026 年 6 月末日までに，学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛に「論文題目」をお送りください。論文原稿は電子ファイルによる提出となります。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第 61 号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第 61 号の特集テーマは，「アメリカとアフリカ」です。趣意は以下の通りです。

60 号を超える歴史を持つ『アメリカ研究』では，これまで様々な特集テーマが組まれてきた。「1920 年代」など特定の時代に焦点を当てるものもあれば，戦争や性，人種，階級，宗教，病といったアメリカ研究に広く通底する重要トピックも多くみられる。アメリカと国内外の地域を結ぶテーマも特徴の一つである。「アメリカにおける西部」（第 5 号），「アメリカの南部」（第 13 号），「アメリカ――西半球の中で――」（第 26 号），「アメリカとアジア」（第 30 号，第 59 号では 2.0 を付して同名の特集が組まれた），「ヨーロッパとアメリカ」（第 53 号）がそれにあたるだろう。60 号までのテーマを振り返ればその多彩さに驚かされ，改めてアメリカ研究が学際的な学問であることを感じる。それはまた歴代の編集委員会がいかに豊富なアイデアを持ち寄って議論を尽くしてきたかということでもあろう。

ただ，その一方で素朴な疑問が浮かんだ。これだけ多くのテーマがある中で，「アフリカ」という言葉が見当たらないことである。もちろん，第 2 号で「人種問題」がテーマに据えられているように，人種をはじめアフリカとの関連は常に語られている。あえて特集にするまでもなく，アメリカ研究においてアフリカを考慮に入れるのは自明だということだったのかもしれない。しかし，だからこそ，正面からアフリカとアメリカを軸にアメリカ研究を問い直してみる必要があるのではないか。当為とされることの意味を改めて考え直すことでアメリカ研究の新たなかたちが見出されるのではないだろうか。

アメリカ研究の各分野においてアフリカとの関連は明白である。文学者は作品の中でアフリカを描くだけでなく，自らアフリカにしばしば足を運んだ。「1619 プロジェクト」に象徴されるように，歴史の分野では大西洋奴隷貿易以降の展開に強い注目が集まっている。アフリカからの移民の増大はアメリカ社会の人種関係に大きな影響を与えており，ソマリアやエチオピアなどからの難民受け入れによるアメリカ政治への影響は顕著だろう。政治経済上の安全保障という観点からアフリカ諸国との関係や同地の資源はアメリカにとってますます重要性を帯びてきている。アフリカ文化が海を越えてアメリカ大陸に拡がり，今もさらに広く展開し続けていることは論を待たない。

「アメリカとアフリカ」をテーマにすることはアメリカ研究に間違いなく豊富な知見をもたらすだろう。会員諸氏から積極的な投稿を期待する。

「特集論文」に応募希望の会員は，2026 年 6 月末日までに，氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛にお申し込み下さい。その際，上記フォームの「お問い合わせ内容」欄に「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。

https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html

原稿締め切りは 2026 年 8 月 31 日（月）とします。

年報編集委員会

『英文ジャーナル』36 号に関するお詫びと訂正

2025 年 8 月末に刊行された英文ジャーナル（*Japanese Journal of American Studies*）36 号において，背表紙の特集名が 35 号と同じままとなっていました。正しくは New Approaches in American Studies です。校正時の確認が不十分でした。執筆いただいた皆様に深くお詫び申し上げます。

英文ジャーナル編集委員会

新入会員 （2026 年 3 月 15 日現在）

藤崎奨太	慶應義塾大学（院）	政，労，史
上岡真紀子	帝京大学	教，その他
芋野亮介	一橋大学（院）	化，芸，衆
安田求	慶應義塾大学（院）	政，宗，ジ

（* 入会申し込み順。専門領域の略記については，PDF 版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による）

編集後記

文化と政治が無縁だなどとは思わないが，第 2 次トランプ政権発足直後に国立級の文化・芸術施設であるケネディ・センターの理事や会長の解任が続き，大統領自身が理事長に就任したことには驚いた。センターではアーティストたちの出演辞退や芸術顧問の辞任による異議申し立てがあり，また商業演劇の舞台でさえも近年移民の苦境を題材にした話題作が多いが，草の根の芸術は，大統領令に基づいた NEA（全米芸術基金）の助成方針転換や少数者向け小規模助成事業廃止などで追い込まれており，アメリカの〈自由〉や創造性はどこに向かうのだろうかと最近鬱々と感じる。

（外岡尚美）

2026 年 4 月 30 日　発行
アメリカ学会
〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4-8
日栄ビル 703A
あゆみコーポレーション内
Tel: 06-6441-5260　Fax: 06-6441-2055
https://www.jaas.gr.jp/
発行人　中嶋啓雄
編集人　南　修平
印刷所　(株)国際文献社
〒162-0801 新宿区山吹町 358-5